ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉漆黒の翼の二人　～篠ノ之姓の転校生～【後編】

夕凪　渚／藤原　ゆきかぜ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉漆黒の翼の二人　～篠ノ之姓の転校生～【後編】

【Ｎコード】
Ｎ７５７３Ｗ

【作者名】
夕凪　渚／藤原　ゆきかぜ

【あらすじ】
義理の姉、束は言いました「学園に行かないかい？」と。
そして主人公は再会する。幼い日を共に過ごした一夏と箒。千冬と共に渡ったドイツでの旧友ラウラと。（※注意　ラウラは最初からオリ主にデレてます。カップリングはタグで）

タイトルの通り、ラウラがメインの創作です。ちょっと崩壊気味なんでご了承をば。あと、作中で何度もドイツ語を使用しますが、自

分は全くの素人なので間違っていれば指摘をお願いします。

前編はこちら【ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ００３３ｒ／】

1話　学園防衛戦〈1〉

戦況の推移は微妙なところである。
防戦である以上、攻勢に出る必要はないのだが――――。
『箒、出過ぎだ！』
雑音と轟音混じりの回線。
一夏の叫びと同時、紅い尾を引く箒の紅椿を追って、白光を纏った一夏の白式が追う。
『分かっているが――――』
「防衛ラインを出た一夏と箒を援護しろ！　同時に敵を近付けるな！」
「「了解！」」
超大型ドーラ戦域征圧砲『絶対砲撃（アブソリュート・ファイア）』に三式弾装填――Ａｕｆｎａｈｍｅｎ！
強烈なマズルフラッシュがチリチリと髪を焼く。
ＩＳでさえも防ぎきれない反動で後退しつつ、弾を目で追う。
数秒の空白。
……敵ＩＳを探知して、ＶＴ信管が作動。対空砲弾の本領発揮、弾幕を形成して一瞬敵ＩＳの動きを止める事に成功――。
『こちら一夏と箒、防衛ライン内に戻った！』
よし……。
『こちら〈きりしま〉！　敵を海上に追い込んでくれ、トマホークで片付ける！』
トマホーク……？　有効性は――――あるのか？　いや、その前に――海自がトマホークを導入したなんて話は聞いてないぞ？
『問題は後回しだ……。試してみる価値はあるだろう――各員、一挙攻勢に出ろ！　敵を海上に追い込むんだ！』
千冬さんの指示で、一気に学園所属の全ＩＳが蒼空に舞い上がる！

自然に先頭は一夏と箒。その後方に近距離戦を得意とする教師陣。
中ほどには、移動した山田先生を軸とする中距離戦団。
そして――後方には自分やラウラ、セシリアを軸としての後方支援。
計３１機のＩＳが一挙に飛ぶとは――前代未聞のことだろう。
「セシリア――狙撃は任せた。前に出る」
『りょ、了解しましたわ！』
少しばかり高度を上げ、戦域制圧砲での曲射を始める。
接地砲撃よりも、今の状況の方が反動がマシなので――４秒１発の連続砲撃を続ける。

残敵は１０に満たないが、戦果は一夏が１とシャル・箒共同で１狙撃砲撃班共同２の計４機のみ――大多数が健在……。
――――せめて、もう少し数を減らさなくては……。
どうするか。
「……行こうか」
ふっ――と、隣に現れたラウラ。
呼ばずとも、声に出さずとも……一瞬で汲み取ってくれたのか。
「……あぁ、行くか」

2話　学園防衛線〈2〉

「最後尾でシールドを張っている2機を最低でも大破させる」
『了解した』
トマホークを放っても、敵のシールドを破壊しておかないと意味がない。
「織斑先生、最接近して敵の防御陣を破壊します。許可を」
散発的な射撃は続いているが、大半はシールドに防がれている。
『……』
少しばかりの間が空いて。
『篠ノ乃とボーデヴィッヒの突入を可能な限り援護し、敵の防御陣を破壊してトマホーク攻撃を可能にせよ』
近距離突撃銃（シュトゥルム・ゲヴェーア）S――弾倉装着。リロード……。
『各機、攻撃始め！』
「行くぞラウラ！」
『応！』
敵の標的になるよう、あえて直線航路を選んで。
絶対防御壁（アイギス）を増設エネルギーに直接繋ぐ。
ただ前へ前へ。
迫り来る攻撃全てを受け止め。
後方からの攻撃は寸分の狂いもないが――全てシールドによって防がれている。
縮まる距離。
何が効果的な攻撃か――――そうだ。
「ラウラ、下へ！」
どちらを追ってくるか――いや、どちらに反応するか。
ラウラに反応すれば、自分に背を向ける事になる。
自分に反応すれば、ラウラに背を向ける事になる。
それはつまり、対IS戦において最強クラスの兵装を持つ2人に

は。
「『もらった！』」
１機だけ、こちらに振り返る。
しかも、ご丁寧なことにも――――。
『貸し一つ、な』
１機をワイヤーブレードで拘束し、もう１機を慣性停止結界（AIC）で完全に止めて見せた。
まぁ……もって数十秒だろうが。
「砲撃後、すぐに絶対防御壁を作動させろよ！」
敵ＩＳの背にピタリと砲口をあてがって――。

連続する４つの爆発音。
２つは、２つの砲門から対ＩＳ用徹甲弾が放たれた音。
その後の２つは、敵ＩＳに衝突して爆ぜる音。
「ラウラ――無事か？」
『あぁ……問題ない』
レーダーから２機は消えた。
「宛、きりしま。敵最後尾防御陣の破壊を確認。攻撃のチャンスです」
『了解した――――トマホーク、攻撃始め！』
レーダー上、きりしまから現れた点がこちらへ向かってくる。
残った８機は今も戦域からの離脱を図っている――。
セシリアが放ったものか――蒼い光が、一寸横を通り過ぎる。
相変わらず、寸分狂わぬピンポイントな狙撃で――――――あれ？

敵は、避けもせず、防御もしなかった。

エネルギー切れ？
無人機にあるまじき結果のはずだが……。
『到達５秒前、総員回避！』

千冬さんの怒号で教師陣が距離を取っていく中。
「ラウラ――――」
『あぁ。いささか気になるな。完全計算で動くはずの無人機が――どうして』
薄い黒色をした絶対防御壁の光が一つにつながって。
「無人機も、まだ完全じゃないのか」
『それが分かっただけでも、十分な成果だろう』
満足げに頷くラウラ。
そのすぐ横をトマホークが掠め。
『見届けるとするか』
「だな。トマホークの威力を見れるなんてそうそう無いだろうしな」

結果を言おう。

直撃

である。
エネルギー切れのＩＳの脆さは知っていたが、無人機には不明点も多い。そんな無人機にもエネルギー切れがあると初めて知った。
そして今、戦闘後の休息もないまま、再び会議室に集められた。
「諸君らに伝えなければいけない事項が２つほどある」
普段とは違う千冬さんの声色。どこか申し訳なさそうな――そんな感じで。
それを悟ったのか、ざわざわとし出した。
「ＩＳ学園の無期限休校と――亡国機業の所在が判明したため……ここが前線基地となることが、決定した」

3話　鷹月静寂

「ＩＳ学園の無期限休校と――亡国機業の所在が判明したため……ここが前線基地となることが、決定した」

……無期限、休校？　亡国機業の所在判明？

ざわめきがより一層大きくなり――――。

「説明を始める。私語を慎め」

決して大きな声ではなかったが。

「よし。説明を始める」

千冬さんの背後のディスプレイが太平洋を中心とした画面に切り替わり。

「つい先程入った情報だ。先日大西洋で国籍不明の潜水艦が発見された。その潜水艦は大西洋から北極海回りで太平洋に出現。アリューシャン諸島の南で消息を絶った。さらに、硫黄島周辺で発見された潜水艦と小笠原諸島沖で合流。その後――」

画面が一枚の写真に切り替わる。

「――グローバルホークが発艦中の様子を捉えた。これは間違いなく――」

全体的に細いが、片腕だけ異様に巨大な……そう、間違いない。

「ゴーレム？……」

「そうだ。水中から発艦しているとみて間違いないだろう」

そうか……亡国機業の所在が判明しないのは、水中に存在していたからか。

しかも、北極回りで大西洋から太平洋に出れるとなると――原子力潜水艦と見て間違いないか。

「潜水艦２隻は硫黄島の西２万キロで消息を絶った。そして……」

そして……？

かなりの空白が空き、千冬さんは静かに語る。

「亡国機業は……我々ＩＳ学園に対し宣戦布告。先程の戦闘の直前

に受理した」
なっ……！？
「至極当然の判断だな。各国最新鋭機が運用されているこの学園を最初に潰せば、あとはずっと楽になる」
ポツリと、隣のラウラがつぶやく。
「なら、俺らが亡国機業を壊滅させれば！」
一夏が拳を握りしめつつ、千冬さんを見据えて大きめな声で。
「そうだ。我々は防波堤にならねばならん。しかし、一般生徒を巻き込むわけにはいかないし――戦う意思のないものを戦わせようとも思っていない」
そりゃそうだ。世界を守るためとは言え、一般人を守れないようでは意味がない。
「一度生徒たちは教室に戻れ。ここからは職員会議だ」
千冬さんも――つらいのか。
一夏に対して度々あったのとは違う溜息。

静か……だ。
普段は騒々しいくらいの1組が、今日はどこまでも静か。
先頭でドアを開けた一夏も、開けてしまったことを後悔しているかのようで。
どうしたものかと、ラウラと顔を見合わせていると――――。
「――話があるの」
不意に立ち上がったのは、一夏曰く「クラス一のしっかりもの」と評されている鷹月静寐で。
「1組全員、学園に残ると決めたの」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7573w/

ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉漆黒の翼の二人　～篠ノ之姓の転校生～

2011年9月24日20時47分発行